

追悼 パリ留学時代の吉田城さん

馬 渕 明 子 Akiko MABUCHI

吉田城さんと初めてことばを交わしたのは、1976年10月のはじめだったと思う。たしかパリに留学したての私の住居がシテ（大学都市）のアメリカ館に決定したときだった。その年度のアメリカ館には日本人が4人いて、城さん、彼の「プティッタミ」（と館長秘書が呼んでいた）生駒典子さん、変わり者の建築家と私だった。建築家は最上階のアトリエにいて、一般の寮室にいたのが私たち3人というわけだった。話しかけてきたのは彼のほうだったと思う。というのは、カップルであった彼らとどう付き合っていったらよいか戸惑っていた私は、自分のほうからお邪魔にならないよう、距離を取ろうと思っていたからだった。ところが話しかけてきた彼らは、とてもにこやかで、遠慮はすぐになくなった。

じつはその前に彼の姿はたびたび目にしていた。東大美術史の高階秀爾先生の大学院の授業においてである。この授業は他研究科に人気があったので、美術史以外に数人の学生が聴講していたが、なかでも城さんはかなり人目を引く存在だった。それは秀才ぶりというよりもあのあでやかなファッションによってであった。フリルがついた花模様の透けたシャツ、ヴェルベットのつややかなほっそりしたパンタロン、そのグループサウンズばりの外観から、気障なやつ、と私が思ったとしてもいたしかたないだろう。パリで最初に彼を目にしたときも、相変わらずすらりとファッションブルで、その上彼に劣らず長身の華やかな女性を伴い、アジア人のカップルとしては「おお!」と思わせるものがあった。

城さんから学んだことは多い。まず留学生としての生活態度である。この人は見かけとは裏腹に、早起きで勤勉、周りに惑わされず目的に向かって努力を惜しまなかった。毎朝のようにカフェテリアですれ違ったが、彼らが9時のBN（国立図書館）の開館に合わせてアメリカ館を出てゆくとき、私はようやく寝ぼけ眼でトレーを持って列に並ぶ、という具合だった。それでもたまに朝食のテーブルが一緒になると、いろいろな人を紹介してくれた。おもに仏文の人たちで、彼らの語学力や知識の豊富さに舌を巻いた。皆さん、現在は著名な研究者となった方たちである。

当時はフランス人の友人をもつ、というのが好ましいこととされていた。何より言葉の面で役に立つし、たまには、田舎の家などに招かれることもあるか

らだ。しかし城さんは「馬淵さん、学部や修士のフランス人なんかと友達になるより、日本人の優秀な人と付き合うほうがよっぽどためになるよ」と言っていた。私はじっさい、マックス・ジャコブを研究していたフランス人女子学生と知り合いになったものの、わがままで仕切り屋で面倒な性格のため閉口した。これで、彼の慧眼は証明された。

彼の学問のレベルは、すでに「BNでブルーストのマニュスクリを読む」という段階に達していて、どこで文献を読むのかさえ覚束ない、日本から来たばかりの私は度肝を抜かれたが、そこで年季の入った専門家たちと知り合いにもなっていたらしかった。しかし肩書きだとか、年齢なんてものにはあまり重要度を見出していなかったらしく、彼自身の価値基準で人々を判定していたようだった。それは自分の研究のパースペクティヴが見えていて、何をどのようにすべきか、をしっかりと把握していたからだったと思うし、自分では決してそうは言わなかったが、彼らに伍してやってゆける自信もあったからだろう。

城さんや典子さんが私に関心をもったひとつの理由は、美術史をやっていたからだったと思う。私の専門は19世紀のフランス絵画で、印象派やその前のバルビゾン派をやりたくてパリに來たのだったが、彼らはすでにモネや世紀末の画家たちについて、かなりの知識をもっていて驚かされた。城さんはブルーストを通して、イタリア・ルネッサンスやフランドル絵画についても豊富な知識をもっていた。さらに夏にはイタリアにも旅行していて、ジョットのスクロヴェーニ礼拝堂や、ヴァネツィアのアカデミアのカルパッチオなどについて丁寧な観察に基づいた詳しいディスクリプションをしてくれた。カルパッチオなどは、私は名前くらいは知っていたものの、ほとんど印象にない画家だったが、城さんや典子さんからその名前を聞いたあと、自室に帰って慌てて美術史のテキストを見直したのを覚えている。おかげでその後アカデミアに行ったとき、カルパッチオの独特の造形と光と影を見逃すことはなかった。私はイタリアもフランドルも彼らの後に行ったので、まさに後塵を拝するということばどおり、彼らのお薦めはきちんと見るようにした。美術史研究者としては情けない話で、期待された何の役割も果たせなかった。少しでも役に立ったとすれば、彼らの会話から出てくるさまざまな美術家や作品について、最小の反応ができたことくらいだろう。彼らは美術について話すのがほんとうに好きだったようで、買い求めてきた画集で作者の当てっこをして遊んだこともある。遊びだったが、本当のところ私は必死だった。ティツィアーノとパルマ・イル・ヴェッキオの様式の違いについて、本気で考えたのも、この頃の成果である。

美術史家というものは、傲慢にも他の分野の研究者が美術について語ること

をいやがるし、また作品の鑑定的神秘に逃げこもうとする。しかし城さんたちの楽しそうな美術についての会話は、そうした逃げを許さなかった。というより、逃げ込むことの無意味を教えてくれた、というべきだろう。美術についてさまざまな語り口がある。どれもが美術についての言説だし、どれかが決して正しいとは言えない。こんな当たり前のことが、美術史家の間だけで通じることばで話している東京の大学院の仲間たちには、見えていなかった。私もその同類だった。パリに来て、ミシュレ街の美術研究所のドゥーセ図書館やベルナール・ドリヴァルのゼミの中だけで過ごしていたら、そのまま知識の量だけを増やして帰国していただろう。それをブルーストという一人の文学者がどう見たのか、なぜそう見たのか、それを愛情と探究心をもって追体験しようとしていた若い研究者がどう見たのか。今思えば、彼らからどんどん投げかけられる質問に、私がきちんと答えられていたとは思えない。やはり美術史のメタ言語の中に逃げ込んでいたふしはある。しかし、それが胡散臭いものだという 것도、自分ではわかっていた。慧眼で豊富な知識をもつフランス文学者に対して、自分のテリトリーを守ろうとして意地になっていたこともあったに違いない。しかしそのこともまた私のエネルギーの源になったことを思えば、まさに上等な日本人研究者から学んだことの大きさは、計り知れないものがあつた。

城さんも典子さんも、週末はけっこう楽しんでた。美術館や映画を見に行くことも多かったようだが、料理は大切な息抜きだった。フランスの食材で日本料理を作る、というのを流行らせたのは、彼らだったろう。週末にムッフ（ムフタル街）に行つては、どこから見つけてくるのか、類似の食材をさがしてきててんぶらや煮物をつくったり、すき焼きや鍋物はもちろん、おでんにまで挑んだ。油揚げも豆腐を粉で作って固めてから揚げるということをしていたし、彼らの手にかかつては、できないものはない、という域に達していた。今のように日本食材やレストランなどほとんどなかった時代である。じつは、ほかの館も似たり寄ったりだったが、アメリカ館では部屋で調理は禁じられていたので、食材の保管は結構たいへんだった。寒い時期、窓の外に食品を出しては、ファムシャン（Femme de chambre）に見つかるというたちごっこだった。窓外に食品を保管するな、というお達しがしじゅう出て、2～3日は寮生はおとなしくしていても、またぞろ前に戻るといふ繰り返しだった。大学都市にある3つの食堂も日曜は休みだったし、金曜はくたくた煮たまずい魚で、2フラン以内で食べられる食堂に普段お世話になつても、週末は自炊しないわけにはいかなかった。そんなわけで、互いに腕をふるっては招待しあう、という関係が続いた。もっぱら招かれるだけ、という人もいたが、城さんと典

子さんの部屋でのご招待は、最高の楽しみだった。マッシュルームで松茸の香りがする、というものを探してきて「松茸」ご飯を炊いたり、本格的なフランス料理もいくつか教えてもらった。

中国本土からフランスに初めて留学生が来たのも、たしか77年である。彼らはみな人民服を着て、3人一組になって歩いていた。シテの留学生の間ではみな興味深々で、彼らを招いて中国の話を聞こう、というのが競争のようになったことがある。食堂だとか、娯楽室で話しかけ、まずお茶に招待する、次に夕食で酒も飲ませてしまおう、と各国の留学生が考えて、いろいろ策を練った。城さんは、文学研究者だけあって、彼らのことを結構細かく観察していた。サン＝ミッシェル通りで下着屋のウインドーをじっと見ていた、とか江青ら四人組が失脚したときには、中国人留学生は数人で部屋に閉じこもり、深刻な議論をしているといったことも教えてくれた。社会主義政府が送り込んだトップクラスのエリートたちが、本国の政争で運命を狂わせられ、その後どんな運命を辿ったのか、ずっと気になっていた。平和な日本から来た私たちには想像もつかないことだったが、食堂では時折椅子を投げ合っただけの乱闘があった。それはおもにアフリカ系の留学生間のことで、聞くとクーデタで追われた前政権の要人の子弟と、新政権の留学生の間での根強い抗争だった。パリには中東やアフリカの要人の子どもが結構来ていて、典子さんの隣部屋のエジプト美人は、ナセルだったかムバラクだかと一緒に撮った写真を部屋に飾っている、と教えてもらった。しかしこの人は精神不安定で、ときどき室内で叫んで騒ぎ、典子さんを悩ませた。シテはまさに世界の縮図のようなところだった。

帰国したのは助手の口があって呼び戻された私が先だった。人事のことなので、3月末の帰国の間際まで他言できない状況だったが、それでも他の人たちに先んじて事情を話すと、とても喜んでくれた。彼らは78年暮れに揃って帰国した。

帰国後彼らはまもなく結婚し、私と彼らは東京と京都と離れていたの、あまり会うことはなかったが、関西の学会の折に2度ほど泊めてもらったことがある。パリからすでに4～5年が経ち、昔話は尽きなかった。その頃彼は発病し、透析に週3日も取られるのだ、ということをつつと何事もないように話した。驚いた私に、彼はそんなに長くない生涯だと言うから、できることをやるのだ、とべつに決意を籠めるでもなく、透き通った明るさで話した。その後それぞれに子どもができたり、仕事が忙しくなったが、家建てるのだとか子どもの受験のこととかちょっとしたことで電話をすると、いつも変わらぬ懐かしい声で長話になった。その間に彼は着々と本を書き、翻訳をし、私には詳しい

ことはわからぬまま、それが世界的に重要な仕事であるという風評を聞いて嬉しかった。

最後に会ったのは、私が1年の海外研修でパリに行っていた2000年の年明けのころだったと思う。ブルースト研究者の吉川一義さんと会うことになって、サンジェルマン＝デプレのカフェ・ドゥ・マゴで朝の8時くらいという妙な時間に待ち合わせした。どうしてもほかに時間の都合がつかなかったのである。城さんが吉川さんは僕の先生みたいなものだからなあ、と言っていたのを思い出したが、話しているうちにシテの日本館の館長になった篠田勝英さんと城さんが突如として現れた。篠田さんも留学時代の仲間のひとりだった。私は城さんのほうは全く予想していなかったので、久しぶりに会えてとても嬉しかった。たわいもない話を2～30分しただけで彼らは空港に向かって発っていった。

城さんとは、研究上の交流もあまりないまま過ごしたが、その間に典子さんがゾラの小説と当時の美術の接点について優れた研究をいくつか発表し、私は教わることが多かった。私自身が興味を持っていた女性表象についての分析を、文学を通して行っていたので、彼女の論文は院ゼミのテキストとして大いに活用させてもらっていた。いつも論文を読むと、パリのアメリカ館で一番若くてきらきらしていた彼女と、それを庇護するように見守っていた城さんを思い浮かべた。

彼の死を知ったのは、たまたま滞在していた暑いミュンヘンの宿でだった。東京の自宅に電話し、篠田さんから連絡を受けた家族からそれを知らされたとき、そんなことがあろうかと頭の中が真っ白になった。翌日買った日本の新聞で彼の名を見たとき、やっとその事実を受け止めなければならない、と思った。その直後、帰国前に半日だけパリに寄ってセーヌ川を見たとき、いろいろな思い出が去来した。うだるような暑さのパリは、生暖かい驟雨が30年前と同じように川や敷石を濡らし、この町がブルーストやゾラや吉田城や多くの人を育んでは送り出し、変わらずにそこにあって、また新しい文化を生み出すエネルギーを蓄えた巨大な存在に見えた。繰り返すが、私のパリ留学生活でのもっとも大きな成果のひとつは、彼を知ったことだと思う。

(まぶち・あきこ 日本女子大学教授)